

# pen

with New Attitude

気になるあのプロジェクト、  
いったい誰の仕業なのか？

8

Aug. 2022  
No.531

アイデアと行動力で  
世界を動かす、

LOCAL

MEDIA

CULTURE

ART / DESIGN

FOOD / DRINK

## “仕掛け人”を探せ！

第2特集

ラグスポ誕生から50年

スポーツウォッチ最新案内



Galerie Patrick Seguin © ADAGP Paris & JASPAF, Tokyo, 2022 C3892



『メトロポール』住宅(プロトタイプ)1949年



た時代に強固な構造体「ポルティーク」を活かした独自の構造を探った。身体を骨格さながら鉄骨などの骨組を構造体とし、その骨格に「ロジカルな補足」を加えることで建物の覆いになるの考えもかたちにした。雨戸と庇の機能を備えた可動式のアルミニウムパネル、数日間建てられるプレハブ式住宅、キッチンなどの設備を「カ所」にまとめて主要な構造体とするセントアイコアシステムも実現。「興味深く、時代を超えて注目される取り組みばかり」岩岡。

「合理的で機能的な建築ですが、その姿は風景に溶け込んでいて、自然に近い存在であることも実感します。ブルーヴェエならではのヒューマンスケールにもぜひ目を向けてほしい」

本展では、組立住宅そのものの展示に注目したい。他にドアパネルや窓複数の構造体なども紹介される。「スタンダードチェア」として知られるシリーズなど、オリジナルの家具が100点ほど並ぶ。「家具は、製図台の上では創作できない」と素材を前に構造を探り、協働者たちと改良を重ねた「構築する人」の存在をまさに知る内容だ。

「美しいものは姿形ではなく、それを構成する組織からの発露と述べ、頭脳と手がまさに直結していた人物の活動を振り返る本展。その業績をいま目にすることの意義にも岩岡は触れる。

「いまなぜブルーヴェエが注目されるのか。素材に最小限の手作業を施すことで最大の機能をもたらす家具や建築、解体や移築ができ、変化に対応しうることで長く使い続けられる建築など、住まいのあり方を今日探る上でも示唆に富んでいます。こちらから迫るほどに見えてくる。それがそがブルーヴェエの魅力の深さです」



Laurence and Patrick Seguin collection © ADAGP Paris & JASPAF, Tokyo, 2022 C3892



© Galerie Patrick Seguin © ADAGP Paris & JASPAF, Tokyo, 2022 C3892

右:『カフェテリア』チェア No.3001 1950年頃  
左:『組立式ウッドチェアCB22』1947年

# ART

いまの時代も示唆に富む、  
ブルーヴェエのスピリット

## ジャン・ブルーヴェエ

Jean Prouvé

1901年、フランス・パリ生まれ。エミール・ガレの後継者であるヴィクトル・ブルーヴェエを父にもつ。16年から鍛冶工芸家エミール・ロバールとアドルベール・サボの工房で修業。兵役の後、23年、ナンシーに最初の工房を開設。建築家マレーヌ・ステヴァンス、ル・コルビュジエなどと協働。その後、工場を開設し、家具製作、住宅の建設などを手がける。ベルギーのエラスムス賞、レジオンドヌール勲章コマンドゥールなどを多数受賞。84年、ナンシーにて死去。



Photo: © Centre Pompidou-Museo d'Arte e Architettura, Roma, 2015

### 『ジャン・ブルーヴェエ展 椅子から建築まで』

7/16~10/16 東京都現代美術館 ☎050-5541-8600(ハローダイヤル)  
◎10時~18時 ※展示室入場は閉館30分前まで  
◎月、7/19、9/20、10/11 ※7/18、9/19、10/10は閉館 ①一般¥2,000  
※開催の詳細はサイトで確認を [www.mot-art-museum.jp/exhibitions](http://www.mot-art-museum.jp/exhibitions)

光彩色の世界を微細に感じとった、  
作家の視点を体感する

### 『蜷川実花 瞬く光の庭』

いのちの輝きと儚さに一貫して向かいながら、多様な表現として発表している蜷川実花。本展を構成するのは、昨年から今年、各地で撮影された樹木や植物、花々の写真や映像だ。捉えられた光に包まれた光彩色の世界が、アール・デコ様式的美術館空間における写真展示やダイナミックな映像インスタレーションとなって表現される。変化続きとなったこの数年、「自分自身も変わった」と語る蜷川の視点と追体験できる貴重な機会。



蜷川実花『瞬く光の庭』

開催中~9/4 東京都庭園美術館 ☎050-5541-8600(ハローダイヤル)  
◎10時~18時 ※入館は閉館の30分前まで ◎月、7/19 ※7/18は閉館 ①一般¥1,400  
※開催の詳細はサイトで確認を [www.mikaninagawa-flickeringlight.com](http://www.mikaninagawa-flickeringlight.com)

感覚と想像の拡張をもたらす、  
インターフェイスとしての表皮

### 『名和晃平 生成する表皮』

「セル(細胞・粒)で世界を認識する」と考え、界面が刻々と変化する作品などを通して新たな彫刻のあり方を探り続ける名和晃平。本展に際して本人は、「情報化時代における知覚や認識のリアリティを背景に、物質と感性を介するインターフェイスとしての表皮に焦点を当てた」と述べる。代表作『PixCell』シリーズも含みながら、気泡が次々沸き立つ最新作『Biomatrix(W)』まで、活動の変遷を紹介。10月以降は市内新施設での作品展示も。



名和晃平『Biomatrix』2018年

開催中~11/20 十和田市現代美術館 ☎0176-20-1127(ハローダイヤル)  
◎9時~17時 ※入館は閉館30分前まで ◎月(祝日の場合はその翌日) ①一般¥1,800  
※開催の詳細はサイトで確認を <https://towadaartcenter.com>

「私がブルーヴェエの存在を鮮烈に感じたのは、パリのボンビドゥールセンターを目前にした時です。1971年のデザインコンペの際、審査委員長としてレンゾ・ピアノとリチャード・ロジャースの提案を推した人物こそがブルーヴェエでしたから」

岩岡がそう語るジャン・ブルーヴェエは、アール・ヌーヴォーの一派でナンシー派の中心人物でもあった画家・彫刻家の父のもと、01年に生まれた。24年に自身の鍛冶工房を設け、その後家具の製作も始める。戦後は、住まいを失った人々のための住宅も手がけた。後に設けたアトリエ工場には300名もの工具が所属するまでに。

その中心にいた本人は、建築家やエンジニアといった既存の枠に自らを取りこめ、コンストラクチュール(構築系)と表現。他に類を見ない試みを実践した人物らしい。ル・コルビュジエも「建築家であると同時に建設者」と彼をたたえた。岩岡は言う。

「ブルーヴェエの建築は、解体でき、軽量で運搬や移築ができる家具のような建築。彼の建築をこうして日本に目にするという自体が、まさにブルーヴェエ建築の醍醐味です」

その活動は素材に触れることから始められた。一例としてスチール。薄い鋼板を曲げることで強度を備える造形を模索したのは30年代初頭のこと。世の中が鉄パイプ製家具に取り組み始め